

NPO法人
子どもセンター／パオ
NewsLetter
vol.16

5周年記念イベントリポート ●
「ぴあ・かもみーる」オープン ●
パオ市民講座「子どもの居場所であり続けること」●



パオ
イベント

5周年記念イベントリポート

7月16日、名古屋市中区栄の中区役所ホールで、子どもセンター「パオ」5周年記念イベント「子どもを支援すること」が開かれました。

作家の落合恵子さんが、2年前に続いて参加してくださいました。落合さんの講演の後、パオのメンバーでもある矢野きよ実さん、パオ理事長の多田元さんを加えてトークショーを行いました。

落合さんは「人災としかいいようのない福島原発事故を通過して、子どもの支援を語ることは今はできない」と、脱原発へ闘っていく決意と未来の子どもたちへの大人の責任などについて話しました。

東日本大震災の報道の中で、頑張る子どもたちを「すばらしいこと」として紹介しすぎることの危うさについても指摘。「テレビで評価されると、本当は泣き続けた子どもが、頑張り続け、追い詰められてしまう」と。震災でもパオの活動でも次の世代の命を考えると、根っこは一緒、とも落合さんは言いました。「その子がその子で『ある』ということ丸ごと私たちは愛することができるのか。子どもは大人に愛されるために悲しいほどの努力をしている。私たち大人も子どもに愛されるための努力をしないといけない」と子どもに信頼されるに足る大人になる大切さも訴えました。

トークショーでは、長くパオにかかわっている矢野さんが、「シェルターでゆっくり休めば、解決していくと思っていた。でもそうではなかったんですね」と、その次につながる支援の大切さを紹介。多田さんや落合さんに「どうしてそんなに子どもを支援できるのか」と問いかけました。

壮絶な虐待や深い傷を負った子どもたちは、「丘のいえ」で休んで安心すると、それまでに積み重なった傷の蓋が取れて、いろいろな形で現れてくる。無理難題を要求する子やリストカットしてしまう子もいるが、それまで出せなかった傷や本音を受け止めてあげる必要があると、多田さん。そして、一人の少女の「歴史」を紹介しながら、長い時間がかかってほんの少しだけれど、普通の穏やかな生活を送ることができるようになった子どもたちの姿があるから、やめられないと教えてくれました。



その上で多田さんは支援は「子どもの意志に反したものであってはいけません」と強調し、①子どもを信じる力 ②子どもを温かく見守る力 ③子どもに耳を傾ける力 この3つが大切だと思うと会場に語りかけました。

落合さんは、「子どもの支援というのは、瞬発力であることではないと思う。長く長くやっていくことが大切だと思うから、ずっと続けていってほしい」とエールを送ってくださいました。矢野さんも「思っていたら必ず通じて、子どもたちは元気になる。会場の皆さんもパオのことを忘れないで、できることをしてくれたらうれしい」と呼びかけました。

●参加者の方がたくさんのアンケートを寄せてくれました。一部をご紹介します。

(落合さんの講演)

- ◆優しい人柄が伝わった。ぶれない生き方を見習いたい。
- ◆「人は弱い。だから素敵だね、いいね、と言ってあげてほしい」との言葉に納得した。「子どもの心に蓋をしてはいけない」の言葉が印象的だった。

(トークショー)

- ◆子どもを虐待してしまう親の置かれている状況を知ることの必要性を感じた。
- ◆パオの具体的な活動が聞けて良かった。パオに出会えた子どもたちは幸せ。
- ◆子どもの幸せは大人の協力と責任と感じた。
- ◆「子どものプライバシーを守る」「テストケースにしてはいけない」に納得。

(パオへのご意見)

- ◆パオの活動を知らせる場をもっと作ってほしい。